

2017 年度
教師海外研修報告書
～国際理解教育の授業実践事例集～

研修国

ベトナム社会主義共和国 ザンビア共和国
(新潟県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・長野県)



はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）では、国際協力に関する知識の普及と国民の理解の推進を果たすべき使命の一つとしており、教育を通じたアプローチとして、国民への開発途上国に関する「知見の還元」、自分に何ができるかを「考える機会の提供」、および JICA が地域での開発教育推進のための「橋渡し役」となることの 3 点に重点を置きながら国際理解教育・開発教育の支援に取り組んでいます。

なかでも学校教育の現場で次代を担う児童・生徒の教育に携わり、国際理解教育・開発教育に関心を持つ教員を対象としては、教師海外研修を毎年実施しています。教員の方々が実際に開発途上国を訪問し、開発途上国が置かれている現状や国際協力の現場、開発途上国と日本との関係に対する理解を深め、その成果を、学校現場での授業実践等を通じて、教育活動に役立ててもらうことを目的としています。

2017 年度は、JICA 東京国際センター及び駒ヶ根青年海外協力隊訓練所の所管地域からは、東京都、埼玉県、千葉県、群馬県、新潟県、長野県から 26 名の教員を募り、国内研修を経て、ザンビア、ベトナムの 2 か国に派遣しました。本報告書は、今年度の研修の概要及び参加者の帰国後の勤務校における授業実践の実例をまとめたものです。

教育現場の第一線で日々生徒たちと向き合っている教員の方々が、実際に開発途上国の空気にふれるとともに国際協力の現場を直接見聞きすることで、実体験をふまえた授業につながると期待しており、今回参加者がそれぞれの教育現場で実践を行っていただいたことは大きな励みとするところです。これらを通じて生徒たちの理解が深まり、他の教員の方々にも波及していくような好循環が生まれることを期待しています。

結びに、本研修の実施にあたりご支援をいただいた外務省、文部科学省、各教育委員会並びに関係諸団体に感謝を申し上げますとともに、今後とも JICA が取り組む市民参加協力事業にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成 30 年 3 月

独立行政法人国際協力機構（JICA）東京国際センター

所長 木野本 浩之

目 次

はじめに	1
1. 参加者一覧	4
2. 教師海外研修概要	5
3. 派遣前研修	10
4. 派遣後研修	12
5. 研修参加者写真	13
6. 海外研修（ベトナム）	14
7. 海外研修（ザンビア）	20
8. 授業実践	26

小学校 教科

大原 則子 さいたま市立大砂土東小学校	世界に目を向けると	小学4年生 学活・社会科	28
石井 理紗子 蕨市立中央小学校	Good Future Project ～未来がよりよくあるために、私たちが今、できることを考えよう～	小学6年生 国語・道徳	34
関村 由貴 あきる野市立多西小学校	世界の未来は君たちにかかっている ～ザンビアからSDGsを知ろう～	小学6年生 社会科	40
平岡 朋子 神津島村立神津小学校	世界とつながろう！ザンビアから考える国際協力	小学6年生 社会科	46
堀江 理砂 大田区立馬込第三小学校	ザンビアと日本 共に生きる～食から考える～	小学6年生 家庭科	52

小学校 総合的な学習の時間

大井川 可奈 品川区立京陽小学校	『一人も取り残さない』社会の実現へ向けて ～SDGsを通して世界とつながる自分～	小学6年生 社会科・市民科	58
栢之間 倫太郎 八王子市立上巻分方小学校	伝えよう！みんなで目指すSDGs	小学6年生 総合学習	64

中学校 社会科・総合的な学習の時間

本間 水月 杉並区立阿佐ヶ谷中学校	日本の様々な地域 ～身近な地域の調査～	中学2年生 社会科	70
浅原 規貴 安曇野市立豊科南中学校	社会に目を向けよう！…安曇野市まちなか調査	中学1年生 総合学習	76
中野 裕子 上越市立雄志中学校	ベトナムと地球規模の課題を想像し、将来の創造力に向けてグローバルな視点でこれからの私たちに何ができるか考えよう	中学3年生 総合学習	82
新井 秀和 長野市立鬼無里中学校	僕たちの豊かさとはなんだろう～ベトナム在住ピンスンの発言から～	中学全学年 道徳	88

他教員と連携した実践

柳澤 章人
墨田区立緑小学校 色はいろいろ、いろいろな世界 小学3年生特別支援学級 図画工作 ……94

高松 敏之
長岡市立与板小学校 比べてみよう「米作り」 見つけてみよう「同じところや違うところ」
～稲作を通してベトナムを知ろう～ 小学5年生 総合学習・外国語 ……100

羽田 徳士
松戸市立小金中学校 理科「消化と吸収」×道徳「国際理解・国際貢献(C-18)」 中学2年生 理科・家庭科・道徳・総合学習 ……106
学活

高等学校 公民科

佐藤 亜矢香
埼玉県立富士見高等学校 「貧困」の解決に向けて私たちに出来ることは何だろうか？ 高校1年生 現代社会 ……112

馬場 隆史
新潟県立国際情報高等学校 発展途上国の経済と南北問題 高校1年生 現代社会 ……118

藤山 由彦
駒場東邦中学校・高等学校 日本は移民を受け入れるべきか
～さまざまな人たちと共に生きていくにはどうすべきか～ 高校2年生 政治・経済 ……124

小林 まゆ子
長野県立上田高等学校 SDGsの視点から持続可能な課題解決を考える 高校2年生 グローバルスタディ I ……128
※ SGHによる学校設定教科

高等学校 地理歴史科

大野 直知
埼玉県立松山高等学校 アフリカの植民地化と独立後の課題 高校1年生 世界史 B ……134

田中 駿一
東京都立六郷工科高等学校 課題に対して「SDGs」を通して考える“私のアクションプラン” 高校2年生 地理 A ……140

高等学校 英語科

陣野 俊彦
東京都立練馬高等学校 「Lesson 8 Paper Buildings」
『Grove English Communication II』 高校2年生 コミュニケーション英語 II ……146

太田 進
東京都立山崎高等学校 アフリカと日本の深いつながりを知り日本の国際協力について考えよう 高校2,3年生 コミュニケーション英語 II ……152
英語表現 II

高等学校 国語科・専門科目

多胡 香穂里
船橋市立船橋高等学校 古典 古文 随筆「徒然草」 公世の二位のせうとに 高校1年生 国語総合 ……158

小暮 一樹
群馬県立太田工業高等学校 安全・環境と設計 高校2年生 機械設計 ……164

宮下 貴美子
群馬県立藤岡中央高等学校 グローバル・ヴィレッジ
～ザンビアから考える世界とのつながり～ 高校2年生 課題研究 ……170

牛坂 留都
埼玉県立常盤高等学校 ザンビアの持続可能なジェンダー開発を考える 専攻科2年生 母性保健 ……176

9. 教師海外研修を終えて ……182

10. 授業実践報告会 ……185

11. 学校・教員のための開発教育・国際理解教育支援プログラム ……187

おわりに ……189

1. 参加者一覧

ベトナムコース参加者

氏名	都県名	学校名	担当教科
大井川 可奈	東京	品川区立京陽小学校	全教科
田中 駿一	東京	東京都立六郷工科高等学校	地歴公民（日本史・地理）
藤山 由彦	東京	駒場東邦中学校・高等学校	地歴公民
柳澤 章人	東京	墨田区立緑小学校	全教科
石井 理紗子	埼玉	蕨市立中央小学校	全教科
大原 則子	埼玉	さいたま市立大砂土東小学校	全教科
多胡 香穂里	千葉	船橋市立船橋高等学校	国語
小暮 一樹	群馬	群馬県立太田工業高等学校	工業（機械）
高松 敏之	新潟	長岡市立与板小学校	言語障害
中野 裕子	新潟	上越市立雄志中学校	英語
馬場 隆史	新潟	新潟県立国際情報高等学校	地歴公民（現代社会）
浅原 規貴	長野	安曇野市立豊科南中学校	英語
新井 秀和	長野	長野市立鬼無里中学校	社会

同行者

氏名	所属	役割
鈴木 啓修	JICA 東京国際センター 市民参加協力第一課	アドバイザー
本田 龍輔	JICA 東京国際センター 市民参加協力第一課	計画管理
関根 崇	JICA 群馬デスク 国際協力推進員	業務調整

ザンビアコース参加者

氏名	都県名	学校名	担当教科
太田 進	東京	東京都立山崎高等学校	英語
栢之間 倫太郎	東京	八王子市立上巻分方小学校	全教科
陣野 俊彦	東京	東京都立練馬高等学校	英語
関村 由貴	東京	あきる野市立多西小学校	全教科
平岡 朋子	東京	神津島村立神津小学校	算数
堀江 理砂	東京	大田区立馬込第三小学校	家庭科・外国語・図書
本間 水月	東京	杉並区立阿佐ヶ谷中学校	社会
牛坂 留都	埼玉	埼玉県立常盤高等学校	看護
大野 直知	埼玉	埼玉県立松山高等学校	地歴公民（地理）
佐藤 亜矢香	埼玉	埼玉県立富士見高等学校	地歴公民（現代社会・日本史）
羽田 徳士	千葉	松戸市立小金中学校	理科
宮下 貴美子	群馬	群馬県立藤岡中央高等学校	理科（生物）
小林 まゆ子	長野	長野県立上田高等学校	数学・情報

同行者

氏名	所属	コース
佐藤 真久	東京都市大学	アドバイザー
古賀 聡子	JICA 東京国際センター 市民参加協力第一課	計画管理
廣瀬 勝弘	JICA 東京 埼玉デスク 国際協力推進員	業務調整

2. 教師海外研修概要

■研修の目的

- (1) 国内研修と海外研修を通じ、世界が直面する開発課題及び日本との関係、国際協力の必要性に対する研修参加者の理解を促進する。
- (2) 研修参加者による学校現場等での授業実践を通じ、開発課題を自らの問題として捉え、主体的に考える力、またその根本解決に向けた取り組みに参加する力をもつ児童・生徒を育成する。

また研修参加後は、JICAと協力し、または自発的に教育現場で国際理解教育/開発教育の推進に活躍していただくこともねらいとしています。

[研修で修得を目指すスキル]

- ① 国際理解・開発教育の必要性を理解し、説明できる。
- ② 開発途上国が置かれている現状、国際協力の現場で起きている現状を理解し、生徒・児童に説明できる。
- ③ 開発途上国と日本との関係、特に相互依存関係について理解し、生徒・児童に説明できる。
- ④ 国際協力の必要性及びJICAの概要を理解し、生徒・児童に説明できる。
- ⑤ 上項を踏まえた開発教育（国際理解教育）の授業計画・教材を作成し、授業を実施できる。

■主催：

独立行政法人 国際協力機構 東京国際センター（JICA東京）
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所（JICA駒ヶ根）

■後援：

外務省、文部科学省、各都県及び政令指定都市の教育委員会、各都県の私立中学高等学校協会

■研修国と募集人数

ベトナム：13名
ザンビア：13名

■研修内容

- ・日本における座学・ワークショップの実施
- ・開発途上国（JICAの事業現場等）への訪問
- ・学校現場での国際理解教育/開発教育の授業実践

■研修日程

7ページに記載のとおり

■応募資格

次の資格をすべて満たす方とする。

- ① 東京都、埼玉県、千葉県、群馬県、新潟県、長野県の国公立、私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、高等専門学校(1～3年生を担当)、特別支援学校において教職員として教育活動に従事していること。
- ② 応募締切(2017年5月12日)の時点で、初任者研修を修了していること。私立学校に勤務する者の場合は、応募締切時点で一年以上の教員経験を有すること。
- ③ 所属する学校の校長の推薦および実践授業の実施およびその公開に理解があること。
- ④ 研修国の事情を勘案した上で、参加に耐えうる健康状態であること(持病を持っていない事、継続的な投薬・治療を行っていない事)
- ⑤ 過去に、本研修、JICAボランティア、JICA専門家、国際協力レポーター、JICAパートナーシップセミナー、ODA民間モニター等当機構の事業にて海外に派遣された経験がないこと。また、それらの事業への応募中でないこと。

■参加要件

次の要件をすべて満たす方とする。

- ① 国内研修及び海外研修の全行程に参加可能であること。
 - ② パソコンメールアドレスでの連絡(ファイルの送受信を含む)が可能なこと。
 - ③ 帰国後、所定期日内に海外研修報告書を提出すること。
 - ④ 帰国後、本研修の定めた期間内に所属校において授業の実践を行うこと。
 - ⑤ 当該授業の実践報告書を提出すること。
 - ⑥ JICAのウェブサイトにて一般公開されることに同意すること。
 - ⑦ JICAが実施する国際理解・開発教育支援事業に協力(エッセイコンテストへの応募など)可能であること。
 - ⑧ 本研修の過年度参加者ネットワークづくり(各都県を含む)に参加・協力可能であること。
- ※ また、研修成果を児童・生徒だけでなく他の教員にも広く還元していただくことを目的とし、校内研修や研究授業の実施を推奨いたします。

■参加費用

(1) JICA負担

- ・ 事前研修時等の交通費、宿泊費(日当は除く)
- ・ 講師謝金(国内研修、海外研修)
- ・ 航空券代(含トランジットの際の宿泊費)
- ・ 旅行雑費(査証料、空港使用税のみ)
- ・ 現地視察に必要な交通費及び入場料
- ・ 海外旅行保険加入費

(2) 参加者負担

- ・ 食費(日本国内、海外研修)
- ・ 現地宿泊費
- ・ パスポート取得費用
- ・ 予防接種代
- ・ 追加保険の加入費用等(必要に応じて)

2017年度の募集要項は、JICA東京のホームページでご覧いただけます。

■研修の流れ

◇派遣前研修

7月1日(土)・2日(日)

- ・研修の趣旨および、JICA や日本の国際協力、訪問国に関する理解を深める。
- ・国際理解教育 / 開発教育への理解と参加型学習の手法の体験。
- ・研修における各自の役割の理解と、海外研修に向けて準備。



◇海外研修

■ベトナムコース：7月26日(水)～8月4日(金)(10日間)

■ザンビアコース：8月7日(月)～8月16日(水)(10日間)

訪問国の現状や国際協力の必要性、日本との関係について、実際の現場を訪問することで体験、理解する。また、授業実践に必要な教材の材料等を収集する。

※帰国後、海外研修報告書の提出



◇派遣後研修

8月26日(土)

海外研修の経験を生かした授業の実施・教材作成について考える。



◇授業実践

9月～12月(各勤務校において1回以上)

研修の経験を生かした授業を実施し、成果を各自で検証する。

※実施後、授業実践報告書の提出



◇授業実践報告会

12月～2月(各都県別に1回)

研修の成果(主に授業実践)について、教育関係者をはじめとする地域の方に報告する。



◇全体報告会

3月18日(日)

一年間を通して得た学びを抽象化し、日常化を進める。また次年度以降の実践について見通しを立てる。



◇教師海外研修参加後(翌年以降)

研修の成果を生かして、各所属校および地域で国際理解教育 / 開発教育を推進する。

- ・授業 / 活動のブラッシュアップ
- ・JICA 国際理解教育 / 開発教育支援プログラムの活用
- ・実践者のネットワークへの参加 等

■JICA教師海外研修（2017年度）事前課題

2015年9月、国際社会は、国連サミットにおいて「持続可能な開発目標」Sustainable Development Goals (SDGs) に合意し、17の国際目標と169の指標が提示されました。SDGsは、複雑に絡み合う経済・社会・環境問題に対し、すべての国が包括的に取り組むことを求めています。開発途上国だけではなく、日本を含む先進国も国内目標を設定し、開発の恩恵から誰一人取り残されない、持続可能な世界の実現を目指しています。JICAは、開発途上国や国際社会とのパートナーシップのもと、SDGsの達成に積極的に取り組んでいます。



派遣前研修の事前課題として、参加教諭には勤務校周辺でSDGsに関係すると思われる写真を3枚撮影し、①撮影者、②撮影場所、③撮影日、④撮影した理由、⑤SDGsとの関係性について記載をし、派遣前研修に持参していただくことをお願いしました。

写真の例

<p>撮影者：山田太郎 撮影場所：●●市立●●小学校近隣 撮影日：2017年5月30日 撮影した理由：駐輪してある自転車が点字ブロックにはみ出して危険 SDGsとの関係：3. すべての人に健康と福祉を</p>	<p>撮影者：山田花子 撮影場所：●●県立●●高校学区域 撮影日：2017年5月30日 撮影した理由：まだ使えるかもしれない家電製品が捨てられている SDGsとの関係：7. エネルギーをみんなに。そしてクリーンに 12. つくる責任つかう責任</p>	<p>撮影者：国際一郎 撮影場所：●●市立●●小学校通学路 撮影日： 撮影した理由：通学路にもいる外来種。ヒトへのサルモネラ菌の感染例あり。在来淡水カメ類の卵を捕食するほか、食物となる水動植物が影響を受ける SDGsとの関係：14 海の命を守ること</p>

■提出された課題（一部）



- ①撮影者：多胡 香穂里
- ②撮影場所：船橋市立船橋高等学校
1年B組教室
- ③撮影日：2017年6月28日（水）
- ④撮影した理由：現在の勤務校には、前任校にはなかったオレンジ色チョコレートがある。色覚異常は見逃されがちであり、板書が見やすくなることは、全ての生徒にとって利益のあることである。板書に限らず、教育活動の様々な面においてユニバーサルデザインを踏まえた取り組みを教員が考え、実践するためのツールを企業と共に開発し、生徒の意見も取り入れながら実践していくサイクルそのものが、持続可能な社会を作り上げる思考へとつながるのではないだろうか。
- ⑤SDGsとの関係：4. 質の高い教育をみんなに 17. パートナリーシップで目標を達成しよう



- ①撮影者：小暮 一樹
- ②撮影場所：群馬県大泉町
- ③撮影日：2017年6月18日（日）
- ④撮影した理由：日常生活にブラジル文化が溶け込んでいる
- ⑤SDGsとの関係：10. 人や国の不平等をなくそう、
16. 平和と公正をすべての人に



- ①撮影者：本間水月
- ②撮影場所：杉並区堀之内、環状7号線沿い
- ③撮影日：2017年6月29日

- ④撮影した理由：住宅街・公園が隣接する地域。このようなバンダリズムが、一か所現れると周辺に広がるなどエスカレートしている。
- ⑤SDGsとの関係：11. 住み続けられる街づくりを



- ①撮影者：石井 理紗子
- ②撮影場所：蕨駅西口商店街
(埼玉県蕨市)
- ③撮影日：2017年6月19日

- ④撮影した理由：商店街にある施設。飲食店開業を目指す市民が期間限定で店舗運営を体験できる。働き甲斐を求める市民と商店街活性化を目指す行政、双方の狙いが一致している。
- ⑤SDGsとの関係：8. 働きがいも、経済成長も 11. 住み続けられるまちづくりを



- 撮影者：宮下貴美子
- 撮影場所：群馬県立藤岡中央高校近隣
- 撮影日：2017年6月28日
- 撮影した理由：休耕田が増えている。農家の高齢化や後継者不足が問題になっている。
- SDGsとの関係：2. 飢餓をゼロに 8. 働きがいも経済成長も 11. 住み続けられるまちづくりを



- ①撮影者：大野直知
- ②撮影場所：自宅
- ③撮影日：2017年6月13日
- ④撮影した理由：東松山名物のやきとりはあまり利用されない豚のカシラ肉を使用しているから。
- ⑤SDGsとの関係：2. 飢餓をゼロに 12. つくる責任つかう責任

3. 派遣前研修

日時：2017年7月1日（土）・2日（日）

場所：JICA 地球ひろば・JICA 東京

- 目的：① 地球的規模の課題、途上国の現状、国際協力・ODA、JICA 事業、訪問国の概要等を理解する。
 ② 国際理解・開発教育の理念・意義を理解し、授業実践に用いる教材の作成方法を理解する。
 ③ 研修における各自の役割を理解する。また、海外研修における各種手続き・事前準備を行う。

7月1日（土） 派遣前研修 1日目@ JICA 地球ひろば

所要時間	プログラム	目的／説明	講師・進行
09:30		受付開始	
10:00	5 開催挨拶	研修の意義・期待される成果について理解する	JICA 東京 杉村悟郎
10:05	20 参加者自己紹介	研修にかかわるメンバーを知る	
10:25	35 【事業説明】 日本の国際協力と JICA 事業 教師海外研修の概要	ODA と JICA 事業について理解する 研修の目的と全体スケジュール確認	JICA 東京 古賀聡子
11:00	5 休憩		
11:05	50 【講義】 開発教育・国際理解教育の概念と手法	開発教育・国際理解教育の基本理念を理解し、参加型学習の手法の一端に触れる	JICA 東京 本田龍輔
11:55	5 移動		
12:00	30 【見学】 JICA 地球ひろば体験ゾーン	SDGs/ 開発教育支援プログラム体験し、世界の課題と国際協力の必要性を知る	地球案内人
12:30	5 移動		
12:35	15 【プログラム説明】 JICA 開発教育支援プログラム紹介	JICA の国際理解教育／開発教育支援プログラムについて知る	JICA 東京 古賀聡子
12:50	70 昼食	地球ひろばカフェ (J's Cafe)	
14:00	60 【講義】 資質・能力と育成に向けた授業づくり	次期学習指導要領および国際的な動向を踏まえ、今求められる資質・能力の再確認、それらを育成する授業案を作るバックボーンを得る	東洋大学 後藤顕一 (元文部科学省 国立教育政策研究所 総括研究官)
15:00	10 休憩		
15:10	60 <コース別> 【講義】 訪問国理解	海外研修先の国別概要を知り、文化・歴史等概要、援助の重点分野、日本との関係、安全対策について理解する	森口加奈子（前ベトナム事務所員） 更科亮（前ザンビア事務所員）
16:10	10 休憩		
16:20	60 <コース別> 【渡航ブリーフィング】 海外研修について	海外研修の日程説明、必要な準備、諸手続きについて説明する。渡航における留意点（入国・出国手続き、経由国対応）予防接種、任意保険・航空券手配など	JICA 東京 本田龍輔 JICA 東京 古賀聡子
17:30	15 事務連絡		JICA 東京 古賀聡子
17:45	幡ヶ谷へ移動	移動・チェックイン	
19:00	60 懇親会	コースごとに研修時のかかり分担も行う	

7月2日（日） 派遣前研修 2日目@ JICA 東京

所要時間	プログラム	目的／説明	講師・進行
09:00	15	事務連絡	JICA 東京 本田龍輔
09:15	90	【講義】 国際理解教育とアクティブラーニング	東京都市大学 佐藤真久
11:00	60	<校種別> 【授業実践事例紹介】 小学校	過年度参加者 佐俣絵美
		中学校	過年度参加者 増田有貴
		高等学校	過年度参加者 岡橋弘和
12:00	60	昼食	
13:00	30	【講義】 授業実践計画の留意点	JICA 東京 鈴木啓修
13:30	30	<コース別> 【個別ワーク】 授業計画の修正・発表準備	東京都市大学 佐藤真久 JICA 東京 鈴木啓修
14:00	10	休憩・発表準備	
14:10	140	<コース別> 【グループワーク】 授業計画の共有と検討	東京都市大学 佐藤真久 JICA 東京 鈴木啓修
16:30	20	事務連絡	JICA 東京 古賀聡子
16:50		解散	



講義「開発教育・国際理解教育の概念と手法」



講義「資質・能力と育成に向けた授業づくり」



講義「授業実践計画の留意点」

4. 派遣後研修

日時：2017年8月26日（土）

場所：JICA 東京国際センター

目的：海外研修の経験を生かした授業の実施・教材作成について考える。

8月26日（土） 派遣後研修@ JICA 東京

所要時間	プログラム	目的／説明	講師・進行
09:30	受付開始		
10:00	5 開会挨拶		JICA 東京 杉村悟郎
10:05	45 <コース別> 【グループワーク】 海外研修の体験の整理	授業実践案の作成に向けて、海外研修の体験／素材を整理し、共有する	東京都市大学 佐藤真久 JICA 東京 鈴木啓修
10:50	60 海外研修の体験の共有	「私の一枚」を利用して各コースの体験を共有する	JICA 東京
11:50	10 休憩		
12:00	30 【講義】 海外研修の体験を生かした授業づくり	授業実践案の作成に向けて、海外研修の体験を生かした授業づくりについて学ぶ	東京都市大学 佐藤真久
12:30	60 昼食		
13:30	30 【講義】 授業実践の振り返りと報告書の記載	PDCA サイクルに基いた授業の実施と報告書への記載について理解する	JICA 東京 鈴木啓修
14:00	60 <コース別> 【グループワーク】 授業実践案の見直し	【前半 60分】 校種もしくは教科毎に授業計画を検討 【後半 30分】 一人2分で単元構成と何を一番伝えたいかを全体で発表	東京都市大学 佐藤真久
	30		JICA 東京 鈴木啓修
15:30	15 休憩		
15:45	60 <都道府県別> 【グループワーク】 授業実践案の共有と検討	都県毎に授業計画を発表しあい、同じ地域の参加者および JICA 東京スタッフと授業実践案を共有する。都県ごとの今後のネットワーク構築を検討する。	各県国際協力推進員
16:45	15 事務連絡・アンケートの記入	今後の研修の流れ（授業実践、県別報告会、3月全体報告会、報告書の提出について）	JICA 東京
17:00	解散		



グループワーク「海外研修の体験の整理と共有」



講義「海外研修の体験を生かした授業づくり」



校種・地域別ワーク「授業実践案の共有と検討」

5. 研修参加者写真

ベトナムコース



ザンビアコース



6. 海外研修（ベトナム）

（1）研修国の概要

正式名称：（和文）ベトナム社会主義共和国
（英文）Socialist Republic of Viet Nam



政 体：社会主義共和国

首 都：ハノイ

面 積：32万9241平方km

人 口：約9,170万人（2013年時点）

民 族：キン族（ベトナム人）86%、他に53の少数民族

言 語：ベトナム語

宗 教：仏教、カトリック、カオダイ教ほか

通 貨：ドン（Dong）

通貨レート（国家銀行による基準レート）：

1ドル＝約22,162ドン（2017年1月）

日本との時差：-2時間

主要産業：農林水産業、鉱業、工業

G D P：約2,019億米ドル（2016年、越統計総局）

一人当たりGNP：2,215米ドル（2016年、越統計総局）

経済成長率：6.21%（2016年、年平均、越統計総局）

略 史：紀元前2世紀ごろから中国の支配を受けたのち、10世紀に独立。1883年フランスの植民地となる。1945年ベトナム民主共和国として独立。1954年南北分割。1965年米軍直接介入開始。1973年のパリ和平協定を経て1976年南北統一。

気 候：南北に1200kmと細長い国土を持つため、同じ時期でも地域によって気候は大きく異なる。ハノイを含む北部は亜熱帯性気候で、四季の変化がある（ただし、ハノイの四季は40度近い夏（4月～9月）と暖房の必要な冬（1～3月）、及びこれらの間に短い春と秋がある程度）。ホーチミンを含む南部は熱帯モンスーン性気候で、乾季（11月～3月）と雨季（5～10月）の二季がある。ハノイの平均気温は摂氏27.3度。

在留邦人数：14,695人（外務省海外在留邦人数調査統計 2015年10月現在）

在日ベトナム人数：180,174人（法務省在留外国人統計 2016年6月末現在）

青年海外協力隊派遣取極：1994年



【参考サイト】

・外務省「各国・地域情勢（ベトナム）」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/index.html>（2018年2月アクセス）

・JICA「国別生活情報（ベトナム）」

<https://www.jica.go.jp/regions/seikatsu/ku57pq000005g185-att/vietnam-p.pdf>（2018年2月アクセス）

(2) 海外研修日程

日付	時間	活動・訪問先	ねらい
7/26 (水)	午後	羽田発→ハノイ着	
7/27 (木)	午前	JICA ベトナム事務所	ベトナム事情、JICA が行っている事業について理解を深める
	午後	POLYVAC <技術協力>	技術移転プロジェクトの現状と成果を理解する
	夕方	振り返りミーティング	研修での学びの整理・共有を行う
7/28 (金)	午前	ベトナム平和村	枯葉剤被害者を通じ戦争の恐ろしさ、平和・国際協力の大切さを学ぶ。
	午後	トゥイアン障害者リハビリテーションセンター <青年海外協力隊配属先>	青年海外協力隊の活動内容とベトナムの障害児教育の現状を理解する。
	夕方	振り返りミーティング	研修での学びの整理・共有を行う
7/29 (土)	終日	各家庭	ホームステイを体験し、ベトナムの家庭、暮らし、文化について理解を深める
7/30 (日)	午前	民俗学博物館	ベトナム民族の生活・文化・くらしを理解する
	午後	ダナンへ移動	
7/31 (月)	終日	カトゥー族の村 <草の根技術協力>	日本の NGO が観光開発支援を行う少数民族の村を視察し、コミュニティ開発の現状、都市部と農村部の格差について学ぶ。
	夕方	振り返りミーティング	研修での学びの整理・共有を行う
8/1 (火)	午前	ホイアン市人民委員会 <草の根技術協力>	日本の自治体を実施する草の根技術協力事業の現場を視察し、日本の強みとベトナムでの手法活用について理解する。
	午後	ハノイへ移動	
8/2 (水)	午前	Truong Nguyen Sieu (私立中・高等学校)	授業の視察を通してベトナムの教育現場に対する理解を深める。
	午後	ハノイ下水道公社 <円借款>	市内の水環境への理解と ODA 支援の現状を学ぶ。
8/3 (木)	午前	Chu Van An Elementary School (公立小学校)	授業の視察を通してベトナムの教育現場に対する理解を深める。
	午後	報告会	研修内容と成果について、JICA ベトナム事務所に報告する
8/4 (金)	午前	ハノイ発→羽田着	

(3) 海外研修トピックス

◆ワクチン・生物製剤研究・製造センター

技術移転プロジェクトの現状と成果を理解するため、ワクチン・生物製剤研究・製造センター(POLYVAC)を訪問し、専門家より概要説明を受けました。その後、実際に工場内を視察させて頂き日本の技術によるワクチン製造の現場を見学しました。



◆ベトナム平和村

枯葉剤被害者を通じ戦争の恐ろしさ、平和・国際協力の大切さを学ぶため、ベトナム平和村を訪問し、施設長よりお話を伺いました。職業訓練施設の視察・枯葉剤被害者の学生と交流を行った他、他国からボランティアに来ている学生にも話を聞くことができました。



◆トワイアン障害者リハビリテーションセンター

青年海外協力隊の活動内容とベトナムの障害児教育の現状を理解するため、協力隊員の配属先を訪問しました。篠田隊員より活動内容や施設概要を説明して頂いた後、施設見学を行いました。意見交換では、日本とベトナムの障害児教育の違いやボランティアとしての苦勞について質問が挙がりました。



◆ホームステイ

ベトナムの家庭、暮らし、文化について理解を深めることを目的に6家庭にそれぞれ2,3人ずつ分かれホームステイを体験しました。各家庭においてタンロン遺跡やホーチミン廟を見学し、ベトナムの歴史について学びました。また、ステイ先の児童に対してインタビューを行い、子どもたちの家庭での生活や将来の夢など、教材化する素材を収集しました。

◆民俗学博物館

ベトナム民族の生活・文化・暮らしについて知るため、民俗学博物館を見学しました。ベトナムに暮らす54の部族について、それぞれの成り立ちや生活習慣、伝統的な民族衣装や住居様式など展示品から理解を深めることができました。



◆公益財団法人国際開発救援財団(FIDR)

草の根技術協力事業として観光開発支援が行われているカトゥー族の村を訪問しました。現地スタッフより概要を説明を受けた後、2つの集落を訪問し、彼らの文化や暮らし、事業の取り組みについて確認しました。参加者は、村人の考えるリーダー像に感銘を受けました。



◆ホイアン市人民委員会

日本の自治体が草の根技術協力事業を実施するホイアン市人民委員会天然資源環境局（DONRE）を訪問し、リサイクルや環境教育といった日本の強みとベトナムでの手法活用について学びました。事業概要について説明を受けた後、一般の家庭を訪問し、ゴミの分別状況や環境問題に関する意識について話を伺いました。



◆グエン・シウ小中高一貫校

小・中・高の一貫教育を行っている私立校を視察しました。校内を見学した後、校長先生より学校の概要について説明を受け、3グループに分かれ、中学生の国語・英語・道徳の授業見学を行いました。



◆ハノイ下水道公社

円借款による日本の支援の現状を学ぶため、ハノイ市下水道公社を訪問しました。下水環境整備事業の概要について説明を受けた後、下水処理場へ移動し具体的な処理システムについて見学し、プロジェクトサイトも視察しました。



◆チュー・バン・アン小中高一貫校

小・中・高の一貫教育を行っている公立校を視察しました。同校は第一外国語として日本語を教えている全国5校のうちの1校であり、日本語で歓迎の歌を歌っていただきました。校内を見学し、2グループに分かれて、美術・算数の小学生の授業を見学しました。



(4) 私の1枚 in ベトナム



世界の共通言語は笑顔！

国や文化、言葉が違っていても共通することがある。それが「笑顔」である。苦しいかもしれない。大きな課題を抱えているかもしれない。でも、おもいきり楽しんでいるときに見られる笑顔は、人の心をほっとさせてくれる。やはり世界の共通言語は、笑顔だよな。



名前 新井 秀和 学校 長野県長野市立鬼無里中学校

女性に支えられる朝市

野菜、果物、肉、魚、卵、おこわ、麺…あらゆる食材が並ぶ朝市を切り盛りしているのは、すべて女性であった。バイクに大量の品物を乗せ、または天秤かつぎで食材を運び、お店を開く。買い物するのもすべて女性であった。市場はベトナムの女性の交流の場であり、経済活動の場であり、働きがい、生きがいとなっている場であるのだろう。



名前 浅原 規貴 学校 長野県安曇野市立豊科南中学校

カトウ族の村

カトウ族の伝統的な竹を使ったかごを作成している。伝統的なものを観光資源として使いながら、自立した経済活動を営んでいる。竹で編んだものは、訪問者にも配られたり、売られたりしている。



名前 馬場 隆史 学校 新潟県立国際情報高等学校

受容する強さ

「この風景に対して、自分ができることは何か？」
JICAやその他多くの人々が、既存の文化を尊重しながら、より良い未来のために奔走する姿を見ました。価値観が急速に変化する中、様々な矛盾や葛藤を受け入れて発展するベトナムの力強さと、その様子を自分なりの視点で伝える大切さを感じた10日間でした。



名前 多胡 香穂里 学校 船橋市立船橋高等学校

ナムザン郡に広がる田園風景



クアンナム省ナムザン郡にあるカトウ族の村へ訪問した帰りに、バスの中から撮影した1枚です。この風景は私が通勤途中で見える「弥彦山を背景にした越後平野」のようで本当に衝撃でした。野山や水田に囲まれて育ってきたせいか、ベトナムに来ているのに、まるで地元にいるかのような懐かしい気持ちになりました。

名前 高松 敏之 学校 長岡市立与板小学校

誇りに感じた日本の技術



日本のODA（政府開発援助）で建設された、ニャットン橋の写真です。ノイバイ国際空港からハノイ市内へのアクセスがしやすくなったと同時に、若者のデートスポットにもなっているそうです。また、写真に写る車やバイクの多くが日本製です。日本の工業技術がベトナム国民の生活を豊かにしていることを知り、誇りに感じました。

名前 小暮 一樹 学校 群馬県立太田工業高等学校

バイクと人々の会話が行き交う国



ベトナムでは、大通りや小道に問わず、所狭しとバイクが行き交う。家族連れ、カップル、単身、乗っている人は三者三様である。また、それと同じくして、人々の会話も行き交っている。店先で、路地裏で、その場所は問わずして。この緩やかで活気ある雰囲気は、かつて日本がそうだった風景をどこか想起させてくれる。

名前 田中 駿一 学校 東京都立六郷工科高等学校

安全できれいな水を



ハノイ市内にある護岸工事舗装未完了の場所
川の周りにはゴミがあふれ、汚れた生活排水も流れていた。
近くには住居もあり、食べ物売りの店もあった。
衛生環境は決して良くない。
住んでいる人はおいも凄しい、健康にも良くない。何とかならないかと願っていた。
近くには舗装済みの所もあり、その差は歴然だった。

名前 大原 則子 学校 さいたま市立大砂土東小学校

ハノイ郊外在住のある家族



ホームステイ先の Dung さん一家とリビングで撮りました。旅行代理店勤務で流暢に英語で話す Thùy さんが、今回初めて受け入れてくれました。ブン・チャーを作ってくれた Hiên さん(父)、午前2時にハノイ市中心部で卸し、地元の市場で果物売りの Diep さん(母)、Dương さん(14才)、Phong くん(7才)の5人家族です。温かいおもてなしをありがとうございました。

名前 中野 裕子 学校 新潟県上越市立雄志中学校

23歳の幸福観



「ベトナム人は幸せ。いつもみんな笑ってる。ベトナムの経済は発展して欲しいと思うけど、日本のように忙し過ぎて時間が無くなるのは嫌だな。好きなことや楽しい時間があればそんなにたくさんのお金は要らない。家族や友達と一緒に過ごす時間が大事。今の生活は貧乏とも思わないしとても満足してる。」と、休日に家事をしながら爽やかに語るホストファミリーの長女ソフちゃん(23歳)の笑顔がなんと印象的でした。

名前 大井川 可奈 学校 品川区立京陽小学校

たくましさ



昨今の日本では、笑顔で居続けること・心を強く持ってしなやかに生きることがとても難しいように感じる。じわじわと自分が侵蝕されていくような。子どもでさえも「村度」しながら生きていかなければならない社会はやはりおかしい。その視点を持って出かけたベトナムにあったのは、たくましさだった。何よりもいま必要とされるもの、それは他者への配慮を忘れることなく、自らの芯を強く持つことではないだろうか。

名前 藤山 由彦 学校 駒場東邦中学校・高等学校

日常が織りなす未来



少数民族である「カトゥー族」の村を訪れた際の一コマ。「村の伝統である織物を、多くの人に広めたい」という想いで作業をする女性たちの側にはいつも、子供たちがいました。

村の未来のため、心を込めて作業をする女性たち。母の作業を日々見つめる子供達の瞳には、どんな未来が映っているのでしょうか。

名前 石井 理紗子 学校 蕨市立中央小学校

リーダーの資質

ベトナムの少数民族カトゥー族のルオンさん。公益財団法人国際開発支援財団や JICA の支援を受け、カトゥー族の生活様式や文化を紹介する開発観光事業のリーダーとして活躍されています。そんなルオンさんが、困難に直面したときにどうするか。



「まず、家族に、あとは、副リーダーに相談します。そして、仲間には、自分たちの活動は、価値があり面白いということ、認識してもらいます。私たちの伝統が観光客の方に伝えられることは、誇らしいことだと伝えるようにしています。」と話されていました。自分の活動に自信と誇りもち仲間へ価値を伝えることで、事業が発展していく。このことは、全世界すべてに共通する、リーダーの重要な資質であると感じました。

名前 柳澤 章人 学校 東京都墨田区立緑小学校

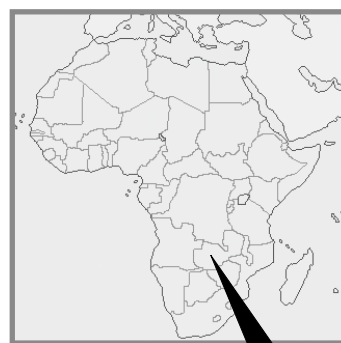
7. 海外研修（ザンビア）

（1）研修国の概要

正式名称：（和文）ザンビア
（英文）Republic of Zambia



政 体：共和制
首 都：ルサカ（Lusaka）
面 積：752.61千km²
人 口：1,659万人（2016年：世銀）
民 族：73部族（トンガ系、チェワ系、ベンバ系、ロジ系）
言 語：英語（公用語）、ベンバ語、
ニャンジャ語、トンガ語
宗 教：8割近くはキリスト教、
その他イスラム教、ヒンドゥー教、
伝統宗教



通 貨：ザンビア・クワチャ（ZMW）

通貨レート：1米ドル=9.31ZMW（2017年9月）

日本との時差：-7時間

主要産業：鉱業（銅、コバルト等）、
農業（トウモロコシ、砂糖、タバコ、綿花、オリーブ油）、観光

G D P：195.5億米ドル（2016年：世銀）

一人当たりGNI：1,300米ドル（2016年：世銀）

経済成長率：2.9%（2016年：世銀）

略 史：8～12世紀バンツー語系民族が北方から到来、先住のサン（ブッシュマン）を駆逐して農耕、牧畜を始める。1889年イギリス南アフリカ会社の管轄下に入る。1964年独立（旧宗主国英国）、カウンダ大統領就任。

気 候：熱帯性気候だが、国土の大部分が高地のためしのぎやすい。季節は5月～8月の「涼しい乾季」、9～11月の「暑い乾季」、12～4月の「暑い雨季」の3つに大別できる。雨季でも降雨後は晴天となり涼しくなることが多い。首都ルサカの年間平均気温は摂氏20.2度で、暑いとされる季節でも日陰はかなり涼しい。日差しは強い。

在留邦人数：281人（2016年10月現在:外務省）

在日ザンビア人数：102人（2016年12月末現在:法務省）

青年海外協力隊派遣取極：1970年

【参考サイト】

- ・外務省「各国・地域情勢（ザンビア）」
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/zambia/index.html>（2018年2月アクセス）
- ・JICA「国別生活情報(ザンビア)」
<https://www.jica.go.jp/regions/seikatsu/ku57pq000005g0zr-att/Zambia-p.pdf>（2018年2月アクセス）

(2) 海外研修日程

日付	時間	活動・訪問先	ねらい
8/6 (日)	夜	羽田空港集合	
8/7 (月)	午前	羽田発→ドバイ着 ドバイ発→ルサカ着	
8/8 (火)	午前	JICA 事務所 ナショナルサイエンスセンター ＜無償資金協力・技術協力 プロジェクト＞	JICA の対ザンビア事業概要、教育分野の協力概要について理解する
	午後	カブロンガ初等学校見学 ＜無償資金協力＞	首都における公立モデル校（校舎は無償資金協力で建設）での教育の実際を視察、教員との意見交換を行う。
8/9 (水)	午前	ザンビア大学 ＜技術協力プロジェクト＞	技術協力プロジェクト（SATREPS）事例を通し、日本とザンビアの研究機関による共同研究の現状と成果を知る。
	午後	マテロヘルスセンター ＜無償資金協力＞	ルサカ郡病院アップグレード計画により建設された病院を視察し、医療協力の現状と成果を学ぶ。
8/10 (木)	午前	カフエ郡農業事務所 丸森町プロジェクトサイト （ムテバ村） ＜草の根技術協力＞	宮城県丸森町の在来技術を活用した小規模農家の食料の安定利用強化プロジェクト視察する。
	午後	栽培デモサイト （ニュートリション村） ＜青年海外協力隊配属先＞	青年海外協力隊（家政）の活動視察。協力隊員との交流・意見交換。
8/11 (金)	午前	ナチボマ初等学校 （マザブカ） ＜青年海外協力隊配属先＞	地方村落部の初等学校における教育の現状視察。青年海外協力隊（青少年活動）の活動視察、教員との意見交換。
	午後	モンゼ初等学校 ＜青年海外協力隊配属先＞ モンゼのマーケット視察	地方都市の初等学校で活動する青年海外協力隊（小学校教育）の活動現場を視察し、授業見学、子供へのインタビュー、教員との意見交換。
8/12 (土)	午前	移動 （モンゼ→リビングストーン）	
	午後	民族文化視察 （Wayi Wayi Art Gallery） 国立公園、ビクトリアフォールズ視察	ベンバ族の文化への見識を深める。 シニア海外ボランティア（経営管理）との意見交換。
8/13 (日)	午前	移動 （リビングストーン→チョマ）	
	午後	移動（チョマ→ルサカ）	移動車内で地方部およびボランティアの活動視察の振り返り
8/14 (月)	午前	ンゴンベコンパウンド （未計画居住区） ＜無償資金協力＞	コンパウンドのベーシックヒューマンニーズ（水、保健、教育）に対する協力成果と現状を視察し、関係者との意見交換を行う。
	午後	カイゼンプロジェクト （ペプシ工場） ＜開発計画調査型技術協力＞	専門家より概要説明を聞き、プロジェクト成果を知る。
8/15 (火)	午前	カプワタマーケット視察 在ルサカ日本大使館	文化村を視察し、教材収集を行う。 現地活動成果を大使館に報告する。
	午後	日立建機ザンビア視察 JICA 事務所報告	ザンビアへの日本民間企業進出の現状を視察する。 JICA 事務所にて研修成果を報告する。
	夜	ルサカ発	
8/16 (水)	午前	ドバイ着 ドバイ発→羽田着	

(3) 海外研修トピックス

◆ナショナルサイエンスセンター

日本と30年以上の協力の歴史をもつ教育研究機関。教育政策研究とカリキュラム策定、現職教員研修、教材開発と作成、IT化などに多角的に取り組む。バンダ所長はJICA研修員として来日して、授業研究を学び、ザンビアへの導入に尽力した人物。



◆カブロンガ初等学校

ナショナルサイエンスセンターがモデル校と位置付けている学校。アクティブラーニングを取り入れた良質の授業を展開。ザンビアの最先端の教育現場でもあります。



◆ザンビア大学

1980年代、銅の生産に頼る経済構造脱却のため、畜産業の拡大を目指したザンビア政府と日本政府の協力により、ザンビア大学獣医学部は創設されました。北海道大学は当初から協力を継続し、現在は人獣共通感染症、鉛汚染のメカニズム解明の共同研究プロジェクト等を実施中です。グローバル化する社

会で感染症が大きな脅威となる中、本プロジェクトで培われた知見が日本のみならず世界中で活用されています。



◆マテロ病院

地方からの人口流入が進む首都ルサカでは、医療サービスの整備が急務。ルサカ郡を5つのゾーンに分け、各地に拠点病院を建設する計画が日本の無償資金協力で実施中です。マテロ地区に建設されたこの病院では、住民約70万人を対象に医療サービスを提供。産科では、一日に14人が分娩する超過密状態ですが、入院、手術が可能なこの病院は、住民のいのちの綱。この日も多くの妊婦や赤ん坊を連れのお母さんたちが訪れていました。



◆カフエ郡農業事務所、ムテバ村（丸森町草の根技術協力プロジェクト）

宮城県丸森町がもつ農業技術を活かして、ムテバ村の換金作物栽培を支援するプロジェクト。きのこ、蜂蜜、米などの栽培技術の移転とともに、住民の栄養改善にも取り組んでいます。村の人々と一緒に現地食（シマ）を調理して食事をとるとともに、村の暮らしや人々の思いに触れて充実した訪問となりました。



◆ナチポマ初等学校、モンゼ初等学校

ナチポマはマザブカの村落部にある電気も水道もない学校、モンゼは地方都市の中心部に位置する学校です。青年海外協力隊員が活動する両学校を訪問し授業参観、ザンビア国内での教育格差も実感しました。教員たちとの意見交換をとおして、教育事情は大きく違っても、教育の大切さへの熱い想いは共通していることを見つけることが出来ました。



◆ンゴンベ コンパウンド

地方から首都へ職を求めて流入した人口の多くは、郊外に未計画居住区を形成し、劣悪な居住環境が問題となっています。そうした地区の一つ、ンゴンベコンパウンドを訪れ、日本の支援で建設された給水塔、小学校、ヘルスセンター等を視察しました。地方の農村とは違った、都市型の貧困問題へのとりくみを見ることが出来ました。



◆ペプシ工場 (カイゼンプロジェクト事業)

日本の高度経済成長の原動力のひとつとして、品質・生産性向上手法(カイゼン)は、世界の生産現場で注目を集めています。ルサカ郊外のペプシ工場では、5S(整理、整頓、清掃、清潔、躰)の概念を採り入れ、工場の生産性を高めることに成功しています。



◆日立建機

日立建機は、ザンビアの銅鉱山をはじめ南部アフリカ各地で活躍する同社製の大型鉱山機械の再生利用をサポートする拠点をルサカに建設し、事業を展開しています。

従業員の8割以上をザンビア人が占め、雇用の創出、奨学金制度による人材育成、法人税による現地経済への還元など、持続可能な関係づくりをすすめています。ビジネスによる国際協力の視点を得ることが出来ました。





(4) 私の1枚 in ザンビア共和国

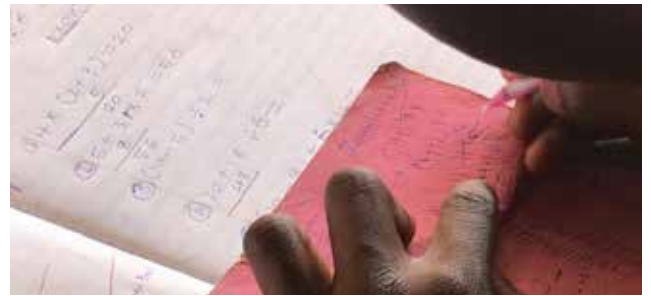
眩い光と底なしの闇が交錯する

マザブカの初等学校の2年生の教室。カメラを向けると笑顔でポーズを決める子ども達。その笑顔からはザンビアの「光」を感じる。教室を見渡すと、制服を着ている子どもと着ていない子ども。学習道具は十分に揃っていない。窓枠には窓ガラスがない。ないものだらけの学校。これがザンビアの「闇」なのか。しかし、教師も子ども達も前向きで熱意をもって生きている。ザンビアの未来に「光」が見える。



名前 関村 由貴 学校 あきる野市立多西小学校

学力の壁



モンゼブライマリースクールの6年生の少年が、算数で $48 \div 6$ の計算に必死に取り組んでいる。しかし、何度も間違える。48本の棒をかき、数えて計算しているからである。少年が将来夢を抱いたとき、学力が壁にならないだろうか。より質の高い教育を彼に提供するために、私たちは何ができるのか。

名前 栢之間 倫太郎 学校 八王子市立上壺分方小学校

Let's think about health !!

都市部の小学校での授業の様子です。3つのグループに分かれて健康についてそれぞれのグループが異なるテーマで議論し、グループの代表が話し合ったことを発表していました。ザンビアでは紙も貴重品だそうです。先生から手渡された小さな1枚の紙を読みながら、身を乗り出して話し合いをする子どもたちの姿がとても印象的でした。



名前 佐藤 亜矢香 学校 埼玉県立富士見高等学校

企業だからできる国際協力



日立建機 ザンビア支店

従業員の8割はザンビア人。人材育成のため現地スタッフの学費まで工面する場合もある。多額の法人税を納めザンビアの財政にも貢献する。企業だからこそできるスケールの大きい国際協力を見た。

名前 羽田 徳士 学校 千葉県 松戸市立小金中学校

「ザンビアの光」

ガラスが割れ、ザンビアの眩しい光を浴びながら、一生懸命ノートをとる9年生。男に生まれて良かったことは？と質問すると、「会社の社長になれる。数学が出来る」と話してくれた。将来、ザンビアの眩しい光となることを願っています。



名前 牛坂 留都 学校 埼玉県立常盤高等学校

友情の笑顔と音楽

「高価なものは外す」「写真はNG」と様々な注意を受けて足を踏み入れたムテバ村。想像に反してたくさんの村人が太陽のような明るい笑顔と歌と踊りで私達を迎えてくれた。シマとチキンのランチをいただき、視察を終えた後、子供達がバケツで奏でるリズムに合わせて、ダンス・ダンス・ダンス・・・の温かいお見送り。小野さんや山本さんなどの日本の方が現地の方と深くつながってきた証である歓迎がとてもありがたかった。



名前 平岡 朋子 学校 神津島村立神津小学校

学校の窓から生活を覗く



ザンビアの学校は、午前・午後の2部制や、3部制の学校もある。この写真は午後の授業の教室の中から撮影した。隣には民家があり、授業中の児童と同じくらいの子が遊んでいた。ザンビアの教育の現状を目の当たりにした。

名前 小林 まゆ子 学校 長野県立上田高等学校

先生は1人ですが、生徒は何人いますか。



日本では1クラス30人から40人です。ザンビアの地方の小学校では、先生1人に対して60人から80人ほどいます。先生の数がありません。教室もノートも教科書も足りません。

しかしザンビアの先生方は教育こそが国の発展に寄与するもの、Education is No.1. と口をそろえて話をします。

この生徒の中から情熱を受け継ぐ未来の先生がたくさん育ちますように。

名前 陣野 俊彦 学校 東京都立練馬高等学校

学は光



英語の学習に真剣に励むザンビアの子どもたち、訪問したカブロンガ初等教育学校の英語の授業での様子を撮影。国は変わっても学びに真摯に向きあう子どもの姿勢は相通するものがあった。ザンビア、そして世界の明日は彼らが担う。

名前 太田 進 学校 東京都立山崎高等学校

Ownership & Sustainability



丸森町の、ムテバ村における小規模農家の食糧安定利用強化プロジェクト視察時の一枚。三大栄養素の学習では現地の人々が主体となって学んでおり、また現地の気候や在来技術を活かすなど、国際協力において重要な Ownership と Sustainability を象徴したプロジェクトであった。一方で電なしで薪を使用している点や、衛生面における課題等も感じた。

名前 本間 水月 学校 (東京都) 杉並区立阿佐ヶ谷中学校

歌と踊りは世界共通語



この写真は、協力隊員が活躍されているカフ工郡の農村を訪れた際に撮影したものである。都市に比べ農村では英語が通じにくかったが、歓迎の意を元気な歌と軽快な踊りで表現してくれた。それに対し私たちは、「幸せなら手をたたこう」を一緒に歌い踊ることで感謝の気持ちを伝えようとした。この写真は、まさに言葉の壁を越えて心が通じたシーンである。

名前 大野 直知 学校 埼玉県立松山高等学校

丸森町プロジェクト視察の際のシマづくり

どのザンビア人も「シマは好き?」と聞くと、笑顔で「もちろん」と答える。学校で「シマが好きかな?」と尋ねると、子どもたちも笑顔で手をまっすぐに上げて「yes!」と答える。

ザンビア人は、国民食・主食であるシマを愛してやまないことが分かった。

村で50人分ほどの昼食を二つの鍋で作った。この鍋で40人分弱だろうか。

この写真は、最後の仕上げで、シマ棒を「くっ」と押し込んで手前に引き混ぜる」作業を体験させてもらっているところ。とても重く、私は両足を踏ん張らないとかき混ぜることができなかった。一方、村のお母さんは、体重移動でうまく、混ぜていた。

もう一つの鍋は、台所として使っている家(わらぶきの小屋)で作っていた。煙が充満していて、私たち日本人は涙が出てたまるず、時々小屋から出ていたが、村のお母さんたちは涙も出さず、ずっと小屋内で作り続けていた。経験値の差を感じた。

今後、授業実践でシマ&おかず作りをする上でも、大切な体験だった。

日本人の私たちが主食のお米に対して愛情をもっているかという視点、伝統食が受け継がれている理由、栄養バランス、食料自給率、燃料でまきを使うこととの環境破壊問題についても、子ども達と考えていくなか一枚の一枚である。

名前 堀江 理砂 学校 大田区立馬込第三小学校

多くの生徒に実験を



ナショナルサイエンスセンターにて、移動式の理科実験装置(モバイルラボ)の製作現場を見学しました。理科の実験に使う様々な道具や装置が、移動式の机の中に入っており、授業を行う教室に運ぶことができます。理科は体験を通して多くのことを学ぶ教科です。限られた予算や物資を最大限に活用するザンビアの先生方の工夫と努力を目の当たりにしました。

名前 宮下 貴美子 学校 群馬県立藤岡中央高校

8. 授業実践 ～研修を生かした国際理解教育の事例～

[ESDの視点に基づいた授業実践]

“持続可能な発展のための教育（ESD）”の視点に基づいて授業を実施し、その視点について報告書内に記載しています。

・「2. 単元の目標」

ESDで重視する7つの能力・態度に該当するものがあれば（ ）内に記載しています。

・「3. 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点（国立教育政策研究所・2014）」

「7 授業事例の紹介」の（1）指導案（オ）本時の展開の表中「指導内容」に留意した視点に沿った具体的な指導内容を記入しています。該当する視点を【 】内に記載しています。

（例：「授業の最初に○○？と児童に問いかける【1】」）

授業実践報告書フォーマット

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

学校名： 氏名： [担当教科：]	● 実践教科等： ● 時間数：時間 ● 対象生徒： ● 対象人数：人
------------------------	---

1 単元名

2 単元の目標
ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る	2 子供の多様な考えを引き出す
3 考えを深めるために対話のある活動を導入する	4 考えるための材料を見極めて提供する
5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する	6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る	

4 単元の指導について

(1)教材観

(2)児童生徒観

(3)指導観

5 評価基準

観点				
評価規準				
評価方法				

9. 教師海外研修を終えて

所属 JICA東京 学校教育アドバイザー

名前 鈴木 啓修

1. はじめに

2016年4月に埼玉県教育委員会から長期派遣研修教員として、JICA東京に派遣されてからの2年間、本研修の計画、及び実施に参画する機会に恵まれた。自分の持てるリソースを活用し、研修内容の充実に向けて自分なりに貢献したつもりである。JICA東京の本研修には、例年、定員のほぼ3倍の応募があり、参加者として選ばれた教員は、私の目から見ても大変、優秀であり、さらに開発教育の実践に対する熱意のある教員ばかりである。主催者側も緊張感を持って参加者に満足してもらえるよう鋭意努力してきた。しかし今後、本研修のさらなる質の向上を目指すのであれば、ここで一度立ち止まり、現状を精査してみることが大切である。ここでは、この2年間の取組を振り返り、今後の取組について考えてみたい。

2. JICA東京の実施する本研修の特徴について

2016年から2017年に実施した教師海外研修において、以下のような取組をすることで、研修参加者の実践が所属校の管理職や所管の教育委員会、及び同僚の教職員に理解され、学校現場で実践しやすい環境を整える支援をおこなっている。

- (1) ESD及びSDGsに関する有識者（東京都市大学・佐藤真久教授）を通年でアドバイザーとして委嘱し、国内研修、海外研修、及び報告会等のあらゆる機会に専門的見地から指導・助言を得る機会を参加者に提供している。
- (2) 国立教育政策研究所等の専門家（後藤顕一教授）を招聘し事前研修を実施することで、学校現場における教育活動の法的根拠である学習指導要領の最新の動向を、参加者に改めて理解してもらう機会を提供している。
- (3) 事前研修において、参加者全員に学習指導案を作成してもらっている。これにより海外研修では、参加者がどのような視点で現地を見、どのような素材を得るかについての明確なイメージを持てるよう工夫をしている。また、事後研修では、海外研修で実際に、体験し学んだことを踏まえて、より具体的な学習指導案の作成に専念してもらっている。
- (4) 本研修の参加者が過年度参加者のネットワーク、日本人学校勤務経験者の研究会等の教員グループとの連携を図るきっかけになるよう、これらの開発教育を推進する教員グループに各都県別の報告会の企画や運営に参画してもらっている。

3. 今年度を実施したカイゼンについて

2016年度の反省、課題を踏まえ、2017年度において新たに、以下のような取組をおこなった。

- (1) 本研修に係る募集要項を、所管する各都県教育委員会のみならず、市区町村教育委員会にも発出し、本研修の周知を依頼した。
- (2) 本研修が年間を通した取組であるということを参加者のみならず、所属長及び教職員が理解し、協力してもらうことは極めて重要である。そこで今年度は、参加者が決定した6月には、当該教員の所属校を訪問し、校長に年間の事業計画、研究授業の実施等を丁寧に説明した。その際、JICA職員・推進員の誰が訪問しても同様の内容が説明できるよう「訪問時説明マニュアル」を作成した。
- (3) 上記6月の所属校訪問の際に、7月の事前研修に向けたSDGsに関する課題を参加者に課した。これにより、SDGsの観点から、地元（日本）と開発途上国は問題を共有していることへの意識づけを参加者に

することができた。

- (4) 上記6月の所属校訪問の際に、9月以降の授業実践は、JICA職員もしくは外部アドバイザーが観察できるよう公開日を設定してもらおうが、その際、授業後に研究協議の時間を設け研究授業として位置づけ、多くの教職員が参加できるよう配慮してもらおうよう所属長に依頼した。
- (5) 各都県の報告会開催の際に、参加者の所属長宛てのみならず、所管する教育委員会にも通知文を发出し所管の他の学校への周知を依頼した。
- (6) 本研修参加者が、研修で学んだ成果及び授業実践を抽象化・日常化することにより、汎用性が高く多くの教員が活用できる成果物を残すことは、本研修の成果の普及にとって大変重要である。そこで、今回新たに、年度末（3月）に東京大学の白水始教授を招聘し、全体報告会を実施することで、開発教育の日常化を目指した授業デザイン原則及び、授業実践の指導内容を教育課程上に明確に位置付ける検討をおこなった。

4. 今年度の成果について

前述のカイゼン点も含め、様々な工夫をおこなったことで、今年度の本研修は昨年度のものより充実した内容、質の向上があったと感じている。以下、具体的にその成果を述べる。

- (1) SDGsに焦点を当てた課題の設定、及び事前・事後研修の実施などの工夫に加え、教育界、及び社会全体におけるSDGsの普及の効果もあり、参加者の多くがSDGsを授業実践の中心的な柱に据えた。これにより授業の内容が訪問国の事柄だけに集中することなく、より汎用性のあるものとなった。
- (2) 参加者26人中、23人が授業後の研究協議を伴う研究授業を実施した。中には、放課後に、校内全教職員が参加した研究協議会を実施した事例や、県教育委員会の主催する授業研究会に合わせて研究授業をおこない、指導主事の参加や、他校から多くの教員を動員した事例などがあった。
- (3) 各都県別の本研修報告会に、所管の県教育委員会で今年度、教師海外研修行政担当者コースに参加した指導主事（埼玉県、千葉県、新潟県）の全員が参加し、指導・助言等をおこなった。これにより今後、本研修参加者と所管する県教育委員会指導主事との人的な繋がりができ、さらなる連携・協力が期待できる。
- (4) 上記6月の所属校訪問の際に、全ての学校において管理職に直接会い、本研修の趣旨、内容を丁寧に説明したことで、ほとんどの校長、副校長、教頭が本研修に興味・関心を持ち、おおむね協力的であった。研究授業を実施したほぼ全ての学校において、校長に授業を観察してもらい、授業後の研究協議にも参加してもらった。また都県別報告会にも参加した校長もいた。
- (5) 年度末（3月）に東京大学の白水始教授から研修及びワークショップを実施したことで、参加者は、今回実践した授業内容の教育課程上への位置付けと、そのための授業デザイン原則、学習指導案作成のヒントを得ることができた。

5. 今後の課題とその解決方法について

2017年度の本研修は、上記3に記載したカイゼンを重ね、工夫をしたことで、上記4にあるような成果があった。しかし、今後さらなる質の向上を図るのであれば、いくつかの課題と、その課題の解決に向けた方法を考える必要がある。以下、その課題と解決方法について述べる。

- (1) 2017年度は、88%以上の参加者が研究授業を実施するという成果があった。しかし、所属校の教職員全員が参加する研究協議を放課後等に設定した参加者は1人であった。また、所管と教育委員会の指導主事や他校の教員を招いて研究協議を実施した参加者は2人に止まった。今後、より多くの教育関係者が参加できる研究授業を実施するには、参加者に少なくとも所属校の教職員全員参加の研究協議の実施を義務付けることが必要かもしれない。また所管の教育委員会の指導主事や近隣の学校の教員の研究協議への参加を努力義務化するなどの工夫を必要であろう。そのためには、所属校の管理職の理解と協力が

不可欠であり、丁寧な説明が必要である。

- (2) 2017年度は、新たに本研修参加者が研修会や講演会等で、どの程度、研修成果の発表をし、成果の普及に努めたかを知るための聞き取り調査を、参加者対象におこなったが、決して計画的な取組とは言えないものであった。今後は、参加者が決定した時点で、成果の普及が参加者の義務であることを明確に伝え、研修会・講演会における普及対象人数の努力目標を設定するなどの工夫が必要である。
- (3) 2017年度は、年度末に授業実践の指導内容を教育課程上に位置づけるための研修、ワークショップをおこない、汎用性のある日常化した学習指導案作成に関するある程度のヒントを得た。しかし今回の学習指導案は、決して完成したものではなく、今後さらなる研鑽を積み、改良を重ねなければならない。そういう意味から、今後は、今年度に作成した授業デザイン原則と学習指導案を、早い時期に参加者と共有し、最終的な成果物であることを認識してもらうことが不可欠である。また、その最終的な成果物の完成に向けて、通年で取り組むことを参加者に促すことも必要である。そのような工夫を続けていくことで、数年後には汎用性のある、日常化した学習指導案を完成させることができると考える。

6. おわりに

ここまで本研修の2年間を振り返り、これまでに実施した改善点、成果、及び今後の課題と解決方法を述べてきた。そしてこの検証・考察は、本研修が明確で具体的な成果を生み、そしてその成果を多くの教育関係者に普及し、学校現場により多くの開発教育の実践者を育てるという目的のために大切である。そしてそのことが、本研修の持続性を高めていくと信じている。50年以上続く本研修がJICAの開発教育支援プログラムの看板事業のひとつであり続けるには、重要な作業である。

しかし私は、このような事業自体の設計、運用上の工夫も大切だが、それ以上に大切なことがあると思っている。それは、参加者の心を揺さぶる衝撃的な体験による自己変容と成長である。参加者は本研修の1年間のプログラムをとおして、熱意のある優秀な教員と出会い、共に本研修の意義と実践について深く学ぶ。そして実際に開発途上国の地で、様々な刺激を受け、感情的な揺さぶりを体験する。心と身体で感じる空気、匂い、人々、言語、文化。JICAの開発支援の現場を目撃することによる開発途上国の現状。そして現地でその国のためにがんばる日本人の姿をとおして感じる誇りと感謝。全てが感動的な体験であり、参加した教員の心に強く訴えるものである。そうした感情の動きが参加者を行動へ突き動かすのだと私は思う。

もし、海外研修が単に授業で使用するための教材の収集、写真や動画の撮影だけが目的であるのならあえて現地を訪れる必要はない。今の時代、そうした教材は、いくらでもインターネット等を活用して手に入るのである。

情熱に溢れた教員が見識を深め、現地に赴き、心と体で本物を体験することで、「児童・生徒に伝えずにはいられない、多くの仲間に伝えずにはいられない」という気持ちになることが最も大切であると思う。それこそが本研修が参加者を開発途上国に連れて行く意味であり「教師海外研修」の真髄ではないだろうか。

最後に、このような素晴らしいプログラムに参画する機会に恵まれたことに感謝するとともに、この仕事をとおして出会った多くの熱い仲間が、私の今後の人生、教師としてのキャリアにとって大切な宝になると確信している。

10. 授業実践報告会

参加者の各都県で実施された国際理解教育セミナーやグローバルセミナーにおいて、地域の方々に教師海外研修の経験を生かした授業実践についての報告を行いました。

■長野県

イベント名：信州グローバルセミナー 2017
日時：2016年12月17日（日）
場所：JICA 駒ヶ根
主催：JICA 駒ヶ根
共催：公益財団法人 長野県国際化協会、青年海外協力隊長
野県 OB 会
参加者：103名
プログラム：
テーマ「持続可能な開発目標（SDGs）で、世界を変える人
づくり～その主役はあなたです！」
1. 基調講演「SDGs ってなに？」
2. 高校生セッション「信州スーパーグローバルハイスクー
ル発 世界とNAGANOをつなぐ学び」
3. 「先生が変われば
教師も変わる～
JICA 教師海外研修
実践授業報告」（参
加者 25名）※三分
科会の選択制



■新潟県

イベント名：第13回国際教育研究会
JICA 教師海外研修授業実践報告会
日時：2018年1月20日（土）
場所：クロスパルにいがた
主催：特定非営利活動法人にいがた NGO ネットワーク
共催：JICA 東京
参加者：39名
プログラム：
1. アイスブレイク
2. 教師海外研修概要
説明と過年度参加
者によるプチパネ
ルトーク
3. 授業実践報告およ
びデモンストレー
ション
4. 教師海外研修行政
官コース参加者に
よる報告
5. 振り返り・座談会



■東京都

イベント名：2016年度 教師海外研修 東京都報告会
日時：2018年1月28日（日）
場所：JICA 東京
主催：JICA 東京
参加者：76名
プログラム：
1. フォト・ストーリー
による海外研修紹介
2. ポスターセッション
による授業実践
報告
3. 協力団体の紹介
4. 座談会
5. 講評



■埼玉県

イベント名：グローバルセミナー 2018
地域で育むグローバル市民
日時：2017年2月4日（日）10:00～16:45
場所：コーププラザ浦和
主催：埼玉国際協力協議会、（公財）埼玉県国際交流協会、
JICA 東京
参加者：93名
プログラム：
1. 教師海外研修授業
実践報告
2. SDGs 活動事例紹介
3. ワークショップ



■群馬県

イベント名：ぐんまグローバルセミナー 2018
日時：2018年2月17日（土）
場所：群馬県庁
主催：（公財）群馬県観光物産国際協会、NPO 法人 ESD ぐ
んま、JICA 東京
参加者：26名
プログラム：
1. 教師海外研修授業
実践報告①
2. 教師海外研修授業
実践報告②
3. ワークショップ



■千葉県

イベント名：国際理解セミナー
日時：2018年2月24日（土）
場所：ワールドビジネスガーデン マリブウェスト 4階会議室
主催：（公財）ちば国際コンベンションビューロー、JICA 東京
参加者：97名（教海研報告参加者【関係者含む】：80名）
プログラム：
1. フォトジャーナリスト 久保田 弘信氏 講演
2. 教師海外研修授業実践報告会（模擬授業・授業報告・パネ
ルトーク）



■全体報告会

日時：2018年3月18日（日）

場所：JICA 東京

目的：一年間を通して得た学びを抽象化し、開発教育実践の日常化を進める。また次年度以降の実践について見通しを立てる。

3月18日（日）全体報告会 @ JICA 東京

所要時間	プログラム	目的／説明	講師・進行
10:00		受付開始	
10:30	10 開会 プログラム説明	【問】JICA 教師海外研修は教師にとって、生徒にとって、なんの役に立つのか（ポートフォリオ使用）	JICA 東京
10:40	60 <校種別> 【グループワーク】 授業実践の振り返り	授業実践を発表・総括する、来年度以降の課題を考える ・実践のイチオシ授業 ・陥った罫 反省点 ・来年度以降にどうつなげるか	JICA 東京 国際協力推進員
11:40	30 振り返りの共有	教科毎に話し合った内容を全体で共有する	東京都市大学教授 佐藤真久
12:10	20 講評		東京都市大学教授 佐藤真久
12:30	60 昼食		
13:30	70 【講義】 開発教育の日常化と授業のデザイン原則	教師海外研修を通して得た学びを抽象化し、汎用化、日常化をすすめる	東京大学教授 白水始
14:40	5 休憩		
14:45	50 【ワークショップ】 教師海外研修の成果を活用した授業のデザイン原則を抽出する	【前半 50分】 実践授業の核となったもの・デザインの原則を言語化する 各学年・各教科の単元のどこに位置づけるか検討する 来年実行することをポートフォリオに記入する 【後半 25分】 各教科授業のデザイン原則を全体で発表 ポートフォリオ完成 【問】JICA 教師海外研修は教師にとって、生徒にとって、なんの役に立つのか	東京大学教授 白水始
16:00	10 修了証授与		JICA 東京所長 木野本
16:10	5 閉講のあいさつ		JICA 東京所長 木野本
16:30		記念撮影・解散	

11. 学校・教員のための開発教育・国際理解教育支援プログラム

学校・教員のための開発教育・ 国際理解教育支援プログラム

JICAは、これまでの開発途上国での国際協力の経験を通じ培ってきた知見を、未来の社会を担う子供たちに役立つ形で伝え、共に感じ、考えていくことにより、日本の教育において貢献するため、国際理解教育/開発教育支援事業を行っています。

JICAは、開発教育/国際理解教育を支援することにより、「世界の様々な開発課題と我が国との関係を知り」「それらを自らの問題として捉え主体的に考え」「根本的解決に向けた取り組みに参加する」人を増やすことを目指します。

教員向けプログラム

●教師海外研修

開発途上国の現状、日本との関係や国際協力への理解を深め、その成果を子どもたちの教育に役立てることを目的とした研修です。校種や地域の違う先生方がチームとなって国内と海外の研修に取り組みます。研修で得た学びと感動を、授業や教材作成を通じて子どもたちに伝えてください！
毎年、全国で約160人の教員が研修に参加しています。



●国際理解教育セミナー

教員をはじめとした国際理解教育に関心がある方々を対象にした国際理解教育/開発教育の基本的な考え方を学ぶ講座を、各地のNGOや教育委員会、国際交流協会と協力して開催しています。ワークショップや参加型学習の手法を体験しながら、世界を学ぶ授業作りにお役立てください。



●青年海外協力隊（現職教員特別参加制度）

公立学校、国立大学付属学校及び私立学校の教員が「教員」としての身分を保持したまま青年海外協力隊・日系社会青年ボランティアへ参加する制度です。教員が開発途上国において国際教育協力に従事することによって、コミュニケーション・異文化理解の能力を身につけ、国際化のための素養を児童・生徒に波及的に広めることが期待されています。

児童・生徒向けプログラム

●国際協力出前講座

開発途上国の実情や日本との関係、国際協力の必要性について考える機会として、JICAボランティア経験者を講師として紹介するプログラムです。ご希望に応じて、開発途上国からの研修員をご紹介することも可能です。学校を中心に、毎年全国で2,000件以上、約20万人が受講しています。



●国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

開発途上国の現状や国際協力の必要性について理解を深め、自分たち一人ひとりがどのように行動すべきかを考えることを目的に、中学生・高校生を対象としたエッセイコンテストを毎年実施しています。上位入賞者には、副賞として開発途上国へのスタディーツアーへ参加することができます。毎年、7万点を超える作品が寄せられています。夏休みの宿題や作文指導としてもご活用ください。

●「世界の笑顔のために」プログラム

開発途上国で必要とされている、教育、福祉、スポーツ、文化などの関連物品を提供していただき、JICAが派遣中のボランティアを通じて世界各地へ届けます。国内の指定倉庫までの送料はご負担いただく必要がありますが、現地までの送料をJICAが負担いたします。個人での参加はもちろん、学校やクラス単位でもご応募いただけます。



開発教育・国際理解教育のための教材

●先生のお役立ちサイト

JICAでは、国際理解教育や総合的な学習の時間に役立つ教材を作成し、無料で提供しています。国際協力や地球規模の課題をテーマにした冊子・動画・ウェブ等の教材をダウンロードすることができます。授業に合わせてぜひご活用ください。



●授業で使える10分映像集

授業でそのまま活用できる、中高生を対象にしたアクティブラーニング用の映像教材です。四つのテーマ「難民」「イスラム」「国際協力・ODA」「教育」をそれぞれ10分程の映像にまとめています。



●国際理解教育実践資料集

世界に存在している課題について、その問題のポイントや子どもたちに知ってほしい内容を分かりやすく解説しています。また、それぞれの学習内容ごとに学習指導要領やESDの分野との関連を示しています。



●どうなってるの？世界と日本

私たちの日常生活と開発途上国とのつながりについて、クイズに答えながらわかりやすく学べる小中学生向け資料です。食べ物やエネルギーなど私たちの生活に欠かせないものはどこからきているのでしょうか。かわいいイラストで楽しく学ぶことができます。



「JICA地球ひろば」のご案内

●JICA地球ひろば

JICA地球ひろばでは、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える問題、国際協力の実情などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示と、開発途上国での活動体験談や参加型学習を組み合わせたプログラムを実施しています。修学旅行、社会科見学等の団体訪問も受け入れており、年間約1万人に見学いただいています。



開館時間：10時～20時（平日）／10時～18時（土・日・祝）

休館日：第1・第3日曜日、年末年始 ○入館無料

連絡先：〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

TEL：03-3269-2911／0120-767278

詳しくはコチラ

JICA地球ひろば

検索

あなたの近くのJICA相談窓口

●JICAデスク

開発途上国で活動した経験を持つ国際協力推進員が、皆さんのお越しをお待ちしています。

- | | |
|-----|---|
| 埼玉県 | (公財)埼玉県国際交流協会内 Tel: 048-833-2992
✉ jicadpd-desk-saitamaken@jica.go.jp |
| 千葉県 | (公財)ちば国際コンベンションビューロー内 Tel: 043-297-0245
✉ jicadpd-desk-chibaken@jica.go.jp |
| 群馬県 | (公財)群馬県観光物産国際協会内 Tel: 027-243-7271
✉ jicadpd-desk-gunmaken@jica.go.jp |
| 新潟県 | (公財)新潟県国際交流協会内 Tel: 025-290-5650
✉ jicadpd-desk-niigataken@jica.go.jp |
| 長野県 | (公財)長野県国際化協会内 Tel: 026-235-7186
✉ jicadpd-desk-naganoken@jica.go.jp |

※東京都については、JICA東京 (Tel: 03-3485-7680) までお問合せください。



おわりに

教師海外研修プログラムは、教員自身が国際理解教育／開発教育／ESDに取り組むに当たり、他都県の現職教員とともに実際に途上国を訪れ、そこで行われている日本の国際協力や支援の現場を視察するとともに、人口増加や貧困問題、近視眼的開発がもたらす様々な環境・開発問題を現場において見て感じ、日本との関係性から「相互依存」と「多文化共生」への理解を深めることを通して、その成果を授業に生かすことを目的としています。2017年度の教師海外研修プログラムは、2015年9月に発表された持続可能な開発目標（SDGs）の発表をうけて、JICA 東京と JICA 駒ヶ根の連携のもと、新体制で本プログラムを再編成し、運営、実施してきました。教員の所属する都県も、東京都、長野県、埼玉県、新潟県、千葉県、群馬県にわたり、第一線の現職教員の参画による有意義な海外研修プログラムでした。

昨年度の教師海外研修プログラムは、教員が所属する校種別で訪問国を分けていましたが、今年度は、校種横断的な派遣編成を行い、ベトナム国とザンビア国において海外研修を行いました。参画した教員は、派遣国や同一校種、出身都県の教員同士でチームとなり、派遣前研修から、派遣中、派遣後研修にわたり、参加準備と現地研修、授業づくりに取り組みました。

先生方は、事前研修で学んだことを実際の海外研修の現場で見て感じることで、「相互依存」と「多文化共生」の理解を深めたことと思います。また、途上国で活躍する日本人に会うことで、多くの感動と日本人としての誇りを胸に刻んだことと思います。帰国後は、それぞれの学校において、「総合的な学習の時間」における国際理解教育や教科指導、道徳教育や学級活動などの学校教育活動に位置付けて実践が行われました。本海外研修プログラムに参画した先生方が現地で受けた感動と学びは、その先生方の言葉に乗って確実に子どもたちに届き、子どもたちも目を輝かせて授業を受けていました。

今回の海外研修プログラムは、持続可能な開発のための教育（ESD）で指摘されている4つのレンズ（統合的レンズ、文脈的レンズ、批判的レンズ、変容的レンズ、UNESCO（2012）に基づく）を基礎にしたものとして特徴あるものとなりました。さまざまな課題・資源・時間・空間・人をつなげる統合的レンズ（つながり・かかわり）、身近な文脈（歴史や地域）で深め、世界の文脈に拡げる文脈的レンズ（拡がり・ふかまり）、課題の再設定や捉え直し、意味づけ、問いを重視する批判的レンズ（捉え直し、意味づけ）、社会が変わる・変える、個人が変わることを連関させた変容的レンズ（個人の変容、社会の変容）を活かすことにより、今日までの教育実践を新たな次元で捉え直すものでした。

新学習指導要領では、「持続可能な社会」という用語が多々明記されているだけでなく、「何ができるか」や「知っていること・できることをどう使うか」といった資質・能力の重視、アクティブラーニングやカリキュラム・マネジメント、社会に開かれた教育課程について強調がなされています。近年のグローバル化の時代、これからの地球市民性と混成文化の時代、VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代において、本教師海外研修プログラムに参画された教員自身がこの経験を活かし、同僚の教員らや地域の方々とともに、新たな次元で、学校教育活動の充実に役立てていただけることを切に願う次第です。

2017年度教師海外研修アドバイザー

東京都市大学大学院 環境情報学研究科
教授 佐藤 真久